

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く ⑦⑤

甲津原の麻織り

麻織物の歴史

民俗学者の柳田国男の著書『木綿以前の事』（1924）によると、日本列島で木綿の布が庶民の日常着となったのは、そう遠い昔ではないようです。木綿の布が爆発的に使われだしたのは、江戸時代になってからです。当時の人びとの心をとらえた綿織物の特徴は、柔らかく、軽く、暖かく、しかも美しい色と模様に染めることができることでした。

では、「木綿以前」に使われていた布はなんでしょう。一般に「麻」とよばれる植物の苧麻（カラムシ）や大麻を原料として作られた上布や太布、原始布とよばれる、粗くごわごわした、大かたは無地の布でした。木綿や絹と異なり、麻は古くから日本でも用いられていて、先史時代の考古遺物からも確認されます。具体

的には、土器に付着した状態や、棺とともに出土するといった形で確認されています。大麻は神事でも重要視され、布用繊維の象徴とされるほか、紙が普及するまでは御幣や注連縄にも用いられたとされます。いまでも、神社に下がっている鈴を鳴らす緒や、鰯口を打つ緒に大麻が使用されている例があります。

滋賀県では、「近江上布」や「高宮布」の名で知られ、その歴史は、鎌倉時代に京都から湖東地方に職人が渡り住んで、麻織物の技術を伝えたことにはじまるといわれています。

第二次世界大戦以降、人々の生活は急速に洋風化し、服装も洋服が浸透して普及しました。また、貨幣経済がいきわたることで、最も手間暇を要する、糸を作り、織り、縫製する、という家庭内労働が放棄されます。しかし、このように極度に高度経済成長をした一九七〇年代にも、

樹皮や草皮の糸作りや布作りが、各地の女性たちによって受け継がれていました。奥伊吹の山間にある甲津原では、昭和五〇年ころまで大麻が栽培され、その麻織物は「甲津原の雪袴（ユキバカマ）」として、よく知られていました。

雪袴の民俗

甲津原では、上着を「テナシ」。カルサンやモモヒキ、タツツケに類するものを「ユキバカマ」と呼びます。甲津原のユキバカマは、四月の雪が積もって太陽が射す、一〇日間ぐらいに晒します。これを二年ほど続けると、布は白くなり、繊維が柔らかくなります。これは、甲津原独特の工程だそうです。

テナシやユキバカマは男子の正装とされ、女子のテナシは丈が長く、とくにナガ着と呼ばれ、女性の正装とされました。甲津原のユキバカマが今日まで残されてきたのは、葬儀やおコナイ、村寄りや儀式ごとの正装とされていたことにあります。新しいユキバカマは正装に、古くなると作業着にしました。



▲ 麻を蒸す作業

麻は、紀元前二〇〇〇年頃から中国で栽培が始まり、五穀の筆頭にあげられています。実は食料となり、油を採ることもできました。麻の葉の文様は無病息災、不老長寿の効があるといわれ、丈夫ですくすくとまつすぐに伸びることから、新生児の肌着などに用いられました。また、茎は麻ガラとして、お盆の精霊の迎え火・送り火に、葬送の棺の底に敷いたり、辻ろうそくのさおにも使ったりしました。これは、清らかな聖なるものと考えられていたからです。また、萱葺き屋根の軒付けにも魔除けとして使われています。

甲津原では綿花栽培が気候条件に適していなかったことから、麻が栽培され、ユキバカマなどの衣装の民俗文化が生まれ、伝えられてきたと考えられます。

（歴史・文化財保護室）